



「入学式でのメッセージ」

学校運営協議会 会長 鈴木 祐二

今日、ここに並んだ新入生の皆さんは、あと6年経つと皆、民主主義の根幹である選挙権を持ちます。

例え経済的には自立していなくとも、大人として扱われるのです。中学校は小学校のただの延長線ではありません。6年後の夫々の在りたい姿から逆算して、今からの1年1年何をすべきか考えて臨まなければなりません。そうした成長への鍛錬の場が中学校です。

ここで身に付けるべき事は単に知識や成績だけではありません。むしろ、トコトン約束を守るとか、弱者に優しくする強い心とか、そして不可欠なのが相手の立場に立ってものを見・考える事が出来る、そうした力です。これらは教室での授業だけでなく、集団の中や外部での体験から学ぶ(=体得する)ことも多いでしょう。

また、中学校は何でも教えて貰う所ではなく、自ら学ぶ所です。生徒の皆さんにとって、先生方はあくまで行く手を示すガイドであり、伴走するアドバイザーであり、後ろから見守るサポーターです。自ら決め・自ら行動し・自らその結果に責任を負う、それが大人への道です。そして、人間は大人になるに連れてだんだん自己責任の度合いが大きく成って行きます。

こうした新しい環境に入る新入生の皆さんを支えて行くのが今日ここに居る保護者・先生方・そして地域の皆さんです。この3者が連携・協力して行くのです。

校長先生と学外の委員11名から成る私たち向陽中の学校運営協議会は、法令に定められた学校運営の基本的な方針の承認や意見の具申をすることに留まらず、この地域の力を活用することをベースに、生徒の皆さんの役に立つ事には何でも前向きに取り組んで参ります。

新入生の皆さん、卒業する3年後そして6年後に、あの時向陽中学校にいて良かったと振り返れるよう心豊かな日々を過ごして下さい。



コミュニティ・スクール



■コミュニティ・スクールとは

地域の人々や保護者の意見を学校運営に反映し、その支援を得て多様な教育活動を展開していく学校です。学校運営や運営に必要な支援について協議する機関として「学校運営協議会」が設置されています。

学校運営協議会 活動報告 (31年3月～令和元年6月)

【第12回 3月25日(月)】

- ・第2回「教員との合同研修会」を開催
テーマ「生徒会の取り組みについて」
①置き勉強、ノーチャイム、ベル着(始業ベルが鳴る前での着席)試行
②「自転車に免許が必要か」というテーマについて、立教大学の河野哲也教授の指導のもとディベートを開催
③ユニセフ募金、みらいサミット代表校としての発表、杉並ろう学校との交流、など
生徒会が取り組む様々な活動内容を聞いた。
- ・「いじめ防止基本方針」を具体的場面に照らして検討してほしいと要望

【第1回 4月19日(金)】

- ・平成31年度学校経営計画を承認

【第2回 5月24日(金)】

- ・令和元年度学校予算・学校運営協議会予算承認

- ・毎年行っている生徒、保護者アンケート内容の見直しを行う予定⇒7月実施予定
- ・校長先生より、来年度より定期考査を年4回にすると報告あり。⇒試験範囲が広くなることに対しては、単元テストや提出物など、総合的に評価していくとの説明があった。

【第6回 6月19日(水)】

- ・いじめ対応のお便りについて、以前から要請していたスクールカウンセラー等へのホットラインの案内がされたことを評価。学校のみでなく都や区が行う相談窓口の電話も載せると更に良いのではないかと提案。
- ・熱中症対策での計測(運動等の中止基準)は、気温のみでなく湿度・輻射(ふくしゃ)熱を含めた「暑さ指数(WBGT)」で判断した方が良いのではないかと提案。
- ・校長先生より、平成30年3月に学校運営協議会から教育委員会に文書で要請していた「美術室へのクーラーの設置」が決定し、夏休み中に設置工事を行うと報告があった。

向陽中学校への主な地域支援

■学校支援本部

授業支援

体育科テニス授業、音楽科お琴授業、介護体験授業
職場体験受け入れ先紹介など

部活動支援

バスケットボール部、ボランティア部への指導者派遣

緑化事業

年数回、校庭の芝生管理(芝刈り)

ひまわりクラブ

職員会議のある放課後などに、ひまわり教室で部活動前まで生徒の見守り活動

子どもクラブ

着付け、茶道

検定試験

実用英語技能検定(英検)、日本漢字能力検定(漢検)の実施

KOYOスタディ(土曜日学校)

土曜日学校として定期考査前の学習支援

場所：向陽中図書室

日時：年10～11回

参加費：年3000円(軽食代)



■地域NPO、有志、その他

Cafe勉(NPO法人すぎなみ子どもサポート)

中学生のための自主学習室

場所：ゆうゆう永福館

日時：木曜日17時～20時

定期考査前 4日間

無料(軽食がある日は50円)



妙法寺子ども食堂(NPO法人すぎなみ子どもサポート)

春・夏休みの子ども食堂での中学生ボランティア体験

場所：妙法寺(杉並区堀之内)

日時：2019年8月5日(月)



その他

- ・卒業生保護者による受験座談会

(卒業生保護者有志「サポートママ」)

- ・向陽祭コーラス指導(地域在住声楽家有志)

- ・向陽こどもまつり(向陽ファミリー) ほか

令和元年度 新委員よりご挨拶



小幡 徹

科学部に所属していた。校庭南端の沿いに、今は暗渠となっている小川で、オタマジャクシやアメリカザリガニを捕り、アオミドロを取ってきて観察をした。昔々の向陽の思い出。それが今に続いている。今の子どもたちはどうだろう。



齋藤 佳子

息子が二人とも向陽中でお世話になりました。子どもたちが卒業した後も、杉並区青少年委員として向陽中の子どもたちに携わっております。子どもたちがより良い環境のもと安心安全に学校生活を送ることができるよう、また、より良い教育が受けられるよう尽力して参りたいと思います。



桜井 誠人

今から30数年前に向陽中学校を卒業しました。校舎や体育館、KSCC建屋など卒業当時のままで懐かしいです。私の学年は7クラスでしたので少子高齢化を実感しています。生徒であった時と協議委員の現在を比べながら益々良い学校になることを期待します。



林 政夫

保護者の皆様はお子さんを何のために中学に通わせているのでしょうか。様々な目的がある中に、できれば「子どもたちが活き活きと成長することを願って」をその目的の一つに加えていただきたいと思います。私はそのための学校の環境づくりに参加したいと思っています。



原田 崇史

憲法13条には「すべて国民は、個人として尊重される」とあります。次世代を担う生徒の皆さん1人1人が、それぞれの個性で輝き、これからの人生の土台を築けるような学校づくりに貢献できれば幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。



三好 由起子

学校運営協議会に参加し、こんなにも生徒のことを考えてくださる地域の方々や先生方がいて、向陽中生は幸せだなと感じました。私もその一端を担わせていただくと、気持ちが引き締まります。子どもたちの豊かな成長を支えていけたらと思っています。

令和元年度 向陽中学校学校運営協議会委員

会長職務代理委員
 長: 鈴木 祐二 (卒業生)
 入江 優子 (東京学芸大学准教授)
 菅野 武彦 (向陽中学校校長)
 小幡 徹 (卒業生・滋賀医科大学客員准教授)
 齋藤 敬 (KSCC副会長・音楽事務所経営)
 齋藤 佳子 (青少年委員・学校支援本部)
 桜井 誠人 (卒業生・JAXA研究員)
 林 政夫 (塾経営)
 原田 崇史 (弁護士・浜田山在住)
 箕輪留美子 (元PTA広報委員長)
 三好由起子 (PTA会長)
 村野 東一 (卒業生・学校支援本部)

事務局: 石津 祐次 (副校長)
 流石 康宏 (主幹教諭)
 菅原 幸弘 (主幹教諭)
 多賀 祐介 (主任教諭)
 崎村 幸生 (主任教諭)
 竹内 雄哉 (事務主事)

岩手県大槌学園

「語り部」学習における交流について

学校運営協議会 入江 優子

平成31年4月10日。東京大学本郷キャンパスにおいて、岩手県大槌町立大槌学園9年生(全67名、東日本大震災発災年の小学校入学生)の「語り部」研修交流会が行われ、運営ボランティアとして、向陽中学3年生5名が参加しました。

大槌学園は、被災した小中5校が統合して2016年に開校した学校で、「ふるさと科」という新設科目を教育課程の柱に置いています。今回行われた「語り部」研修交流会は、「ふるさと科」の集大成である“一人ひとりが自分なりの「語り部」になる”を目標とする学習の一貫として、関東で活躍する大槌出身者と9年生が語らいながら、ふるさとと自己を見つめ直す取組でした。

向陽中生は、大学生ボランティアに交じり、話し合いの進行や記録の補助という形で各班に入り、同学年の大槌学園生徒の話に耳を傾けていました。

私たちが生きる地域社会は、現在の都市であれ山間地であれ、長い歴史や文化、そして自然の礎とともにあります。その中で、大規模災害や環境破壊、文化的荒廃に直面することもあるでしょう。出来事の裏には人々の生活があり、状況を受けとめながらより良い社会を創造しようとする営みがあります。

異なる文化・経験を持つ人々に触れ合うことを通して、また自分たちの地域や自己を見つめ直す。今回の研修交流会への参加が、向陽中の皆さんにとって社会を見る視点の広がりにつながっていれば幸いです。

※会の最後には、交流の歌として、大学生ボランティアとともに「変わらないもの」(伴奏：小貫和さん)を合唱しました。



岩手県大槌町立大槌学園
小中一貫教育校の校舎



「ふるさと科」のわかめ学習。写真中央(緑色ジャージ)は学園長(校長)



「ひょっこりひょうたん島」のモデルとなった大槌町の蓬萊島



東京大学で行われた
研修交流会の様子



●参加生徒たちの感想より(一部抜粋)

「震災というどうしても暗い印象を持ってしまうのですが、交流会ではそれ以上に地元への愛や復興への前向きさを多く感じました。同学年の子と方言の話ができたり、視野が広がった気がします」

「つらい経験も私以上にたくさんしてきたと思うし、思い出すのも大変だったとは思いますが、今回聞いたことは家族や友人に話そうと思います」

「岩手県の良さがわかりました。友だちをつくったり、大きな声で笑ったり、特技を身につけることが大事だということを学ばせてもらったので、今後生かしていきたいと思います」

「大槌学園のお話を聞いてふるさとへの強い思いを感じました。大槌学園で行われている“ふるさと科”は大槌ならではの活動で、東京の学校にはないような活動なので、私は羨ましいと思いました。」

「私は被災地の状態をテレビなどで見ていましたが、同年代の人のことを考えていませんでした。今日話を聞いて皆さんのことを考えていなかった自分に衝撃を受けました。(中略)そういう事実があると知っていてもどこか他人事のように考えていました。しかし皆さんの話を聞いて身近に感じることができました。」